

琉球大学学術リポジトリ

《道徳・実践報告》 協調学習の手法による道徳の授業づくり

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2016-10-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮城, 将吾, 中村, 謙太, 金城, 園美, Miyagi, Shogo, Nakamura, Kenta, Kinjo, Sonomi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35467

協調学習の手法による道徳の授業づくり

宮城将吾* 中村謙太* 金城園美*

*琉球大学教育学部附属中学校

I. はじめに

平成27年度3月に特別の教科としての道徳(道徳科)の設置について、学習指導要領の一部改正が告示された。文部科学省が示した「道徳教育の抜本的な改善・充実」によれば、道徳の時間の課題として次のことがあげられている。

- ・道徳の時間は各教科に比べて軽視されがち。
- ・読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導。
- ・発達段階などを十分に踏まえず、生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業。

とある。そこで、その改善策の中に「問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れ、指導方法を工夫すること」が示され、考え、議論する道徳科への転換によって生徒の道徳性をはぐくむというのが今回の道徳科の趣旨である。

以上のことを踏まえると、本校で取り組んでいる協調学習の手法を道徳の時間においても取り入れることは可能である。そこで昨年度より、道徳の授業づくりの検討を道徳推進教師を中心に取り組みをスタートとさせており、知識構成型ジグソー法による授業実践を本校研究発表会で実施した。本年度は、各学年協働で道徳の授業案を作成し、実践することにした。

II. 目的

知識構成型ジグソー法による道徳の授業を各学年協働で行い、協調的な学習の中で、どのように生徒が、ねらいとする道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深めることができたのか考察し、その成果と課題から今後の本校における道徳の授業の研究推進の手がかりを得る。

III. 実践内容

(1) 1学年の取り組み

① 実践の主題

内容項目・主題名

- 2- (1) 時と場に応じた言動,
- 2- (2) 思いやりの心

② 教材づくりの経緯

本校1学年の生徒の実態をふまえ、今、必要な内容項目は何なのかを話し合い、主題に基づきながら、授業を展開した。教材に関しては、道徳の副読本をベースにジグソー法へ転換していく内容を練り合い、作成した。ジグソー法で授業を展開するためのエキスパート資料はもとより、読み物資料も修正を図り活用した。

1学年では、ひとつの指導案を全員で共有し、全学級で同じ主題を取り組むことを確認し、さらに1学級(1時間)終えるごとに振り返りを行い、次のクラスではさらに手直し、修正を図った指導案を基に授業を行った。

③ 授業の様子

本時では、導入で「病院でのお見舞いの経験を想起する」→展開で「登場人物の気持ちになる(ジグソー活動)」→終末で「学校生活の場面に置き換えて、あなたならどうする?」という流れを柱とした。

また、エキスパート資料、ジグソー活動、ワークシートの内容をシンプルにすることで、生徒はじっくり考えることができていた。

期待される解(言葉)が、生徒のワークシートから見取ることができ、ジグソー活動及び、クロストーク活動を通して、学校生活のあらゆる場面や、生徒自身の生活全般に合わせて、自己内省させることができた。

クロストーク活動を終え、最終的に期待される解以上の答え(心の声)を反映していた生徒が多く見ら

れたと同時に、本題材の主題を最終的にしっかりと受け止めることができる生徒が多くいた。

ジグソー活動では、資料を読む生徒もいたが、自分の言葉で伝えている生徒もいた。

エキスパート活動で、登場人物の立場を理解し、ジグソー活動で互いの立場を紹介し合わせた。資料を読み込む力の差が生じ、話し合いの深まらない班もあった。

④ 成果

1年生は、道徳の授業におけるジグソー活動は初めてであったのだが、1回目、2回目と回を重ねていくにつれ、少しとまどいは見えたものの、エキスパート活動やクロストーク活動に入ると互いに「対話」を重ね活動を進めることができていた。

⑤ 改善のポイント

- ・道徳の授業を通して、身につけさせたい力を明確にし、知識構成型ジグソー法をどう取り入れるかを吟味すること。
- ・エキスパート活動の問いの設定の仕方や、意見交換する内容の設定（どのような道徳的価値を身につけさせたいか）
- ・エキスパート資料の内容をどう伝えるのか。（補助発問の設定など）
- ・中心発問を何にするのか、どの場面で問いかけるかなど、授業デザインの方法
- ・各活動（エキスパート・ジグソー・クロストーク）ごとの時間配分
- ・座席のスムーズな移動方法
- ・ジグソー活動における「対話」の鍛錬。
- ・ジグソー法の一連の流れを継続して行えるようにする。道徳でも慣れていく。
- ・心を揺さぶる題材の設定、発問の工夫の吟味
- ・クロストークの活性化を図るための教材や問いの工夫
- ・実生活で生かすために道徳的実践力にどのように繋げていけるか

⑥ 各学習活動の様子

エキスパート活動に入る前に、自分の心に問いかける時間を持つ。

（ア）エキスパート活動

4人1グループで各エキスパートの資料を読み込んでいく。（登場人物のプロフィール及び心の声）

◆エキスパート資料A：隆のプロフィール・心の声

◆エキスパート資料B：祐二のプロフィール・心の声

◆エキスパート資料C：琉介おじさんのプロフィール・心の声

◆エキスパート資料D：恵美さんのプロフィール・心の声

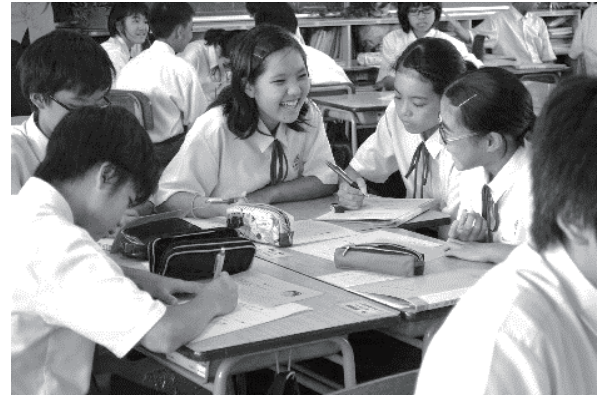


図1 エキスパート活動の様子

（イ）ジグソー活動

各エキスパート1人ずつ（A、B、C、D）の4人のグループで、話し合う。その際、各エキスパートのそれぞれが自分の言葉でしっかりと伝えることができるようにする。（それぞれの人物の背景を知り、その時の主人公の気持ちや登場人物の気持ちについてディスカッションしていく）。



図2 ジグソー活動の様子

（ウ）クロストーク

ジグソー活動を通して深めた内容を基に、全員で本時のテーマに基づき話し合いを展開していく。最後に再度、自分の心に問いかけ、本時での学びをとして実生活で生かすために必要なことについてまとめていく。さらに自分の心の中に見えてきた大切なことについて自己との対話を深め自分の考えを発表する。



図3 クロストーク活動の様子

⑦ 授業後のふりかえり（生徒のワークシートより）

（ア）今日の授業で何を学んだこと

- ・周りの人のことを考えて行動できるようにする。
- ・人に迷惑をかけないようにする。
- ・自分が良いと思ってやったことでも、相手にとって嫌と思われることもあることがわかった。
- ・自分のことだけ考えるのではなく、他人の気持ちも考えて行動する。
- ・気を遣えることが大切だと知った。
- ・周りへの気遣いや、思いやりを大切にすること。
- ・公共の場では、テンションが上がっても静かにすべきだと感じた。
- ・周りの空気を読み、相手のことを考えて行動する。

（イ）今日の授業で学んだことを学校生活に活かすために必要なことは何だと思いますか？

- ・常に相手の気持ちを考えることが必要だと思う。
- ・状況を見て周りへの声かけなどを自分から行う。
- ・どんな場面でも人の気持ちを考えることは大切だと思う。

（2）2学年の取り組み

① 実践の主題

内容項目 4-（5）勤労の尊さや意義

② 教材づくりの経緯

2学年では6月下旬から職場体験に3日間取り組む。生徒個々に関して言えば、おおよその生徒が職場体験を心待ちにしている雰囲気もあるが、中には希望していた事業所や職種にマッチしていない生徒もいる。そこで、これから迎える職場体験を前に、道徳の授業を通して、勤労の尊さや意義について道徳的価値を補充、深化させたいと考える。

本時のねらいとして、働くということは、周囲の人々とのコミュニケーションが大切であり、多くの人たちに支えられていることに気づかせることで、自分なりの「働くこと」の理解を通して、一人一人の職業についての考え方を育てていきたいと考え、本時を設定した。

教材は、アルバイトをしながら定時制の高校に通う生徒の作文を「私が働く理由」（第5回「金融と経済の明日」高校生小論文コンクール 入賞作品）を資料として活用した。アルバイト先で失敗ばかりして「自信がなくなり辞めたくなくなった」経験の中で、まわりの人との関わりの中から「働くことの意義」について考えていく高校生の心の変化が素直に表現されている資料である。この資料をもとにジグソー法による協調学習を取り入れることで、勤労の尊さや意義について道徳的価値を補充、深化させることを意図した。

授業については、学年全体で1つの指導案をつくり、その指導案で1クラスずつ授業を実施し、2学年の全学級で実践した（同じ指導案で3学年の1クラスでも実施した）。授業のたびに2学年職員で参観し、振り返りを行い、それを受けて指導案を修正し、次の授業へ生かしていく方法で、くりかえし授業改善を図っていくことができた。

③ 授業のようす

本時は、「人はどんな理由で働いているのだろうか」を主発問に授業を展開した。本時の学習活動の流れを以下に示す（図4）。

<導入>

導入では、「社会人1年目と2年目の意識調査」（2014年ソニー生命保険会社）を用いて、約4割の新人の社会人が3年以内に辞めたいと考えていることや、実際に若者の早期離職者が多いことをとりあげると、多くの生徒がとても驚いていた。新人の社会人が「やめたい」と思う理由をペアで考えさせると、「仕事内容がやりたいものじゃなかったのでは？」「人間関係が嫌になったのか」「仕事が見つかったのではないかなど、活発に予想を出し合うようすがうかがえた。実際に自分が働く経験をするまでには「まだまだ時間があり、ずっと先のこと」と考えている生徒が多いことが予想される中で、「働くこと」を自分ごととして考えていくための動機づけを行うことができた。

導入 (10分)

- ・「社会人2年目の人に聞きました。最初に就職した会社でどのぐらい働きたいかたずねたところ、一番多かった答えはどれだと思いますか？」←若者の早期離職者が多い実態をつかむ。
- ・本時の問い「人はなぜ働くのか」を提示。

《活用資料配付》「私が働く理由」(第5回「金融と経済の明日」高校生小論文コンクール 入賞作品)

エキスパート活動 (10分)

- A 母親はどんな気持ちで私のことを叱ったのだろう。
- B チーフは私にどんな気持ちで声をかけたのだろう。
- C 客は私の働きぶりをみてどう思っているのだろう。

ジグソー活動1⇒クロストーク (10分)

- それぞれの立場の人の心情を聞いた上で、「どうして『私』は発熱で休んだときに、なぜ働くのかについて考えるようになったのか？」を話し合う。
- 1～4班の人に発表させる。

ジグソー活動2⇒クロストーク (10分)

- 「このあと『私』は仕事を辞めたいという気持ちから、学校卒業までずっとこのお店で働きたいという気持ちに変化します。なぜ気持ちが変わったのだろうか？」について話し合う。
- 5～8班の人に発表させる。

個人で考える (10分)

- 「今日の授業をふまえて、あなたは職場体験先ではどのように働きたいですか？」
- ※個人で考えさせ、ワークシートにまとめる。

図4 本時の学習活動の流れ

で関わりがあることに目を向けさせることができた。

<ジグソー活動・クロストーク>

ジグソー活動の前半では、はじめにエキスパート活動で話し合ったそれぞれの立場の人の心情を聞いた上で、「どうして私は『なぜ働くのか』について考えるようになったのか」について話し合わせた。クロストークでいくつかの班の話し合った内容を共有した。「嫌な自分を変えたいと思ったのでは?」「途中で投げ出すのが悔しいからではないか。」などの意見が挙がっていた。

ジグソー活動の後半では、資料の後半を読んだ後、「私が『仕事を辞めたい』から『学校卒業までずっとこのお店で働きたい』と気持ちが変わったのはなぜか」について話し合わせ、クロストークでいくつかの班の話し合った内容を共有した。「まわりの人に励まされて勇気づけられたから」「相談に乗ってくれた先輩や支えてくれた両親への感謝の気持ちから」などの意見が挙がっていた。本時のねらいとしていた「働くということは、周囲の人々とのコミュニケーションが大切であり、多くの人たちに支えられていることに気づかせる」ことは概ねできたのではないかと考える。



図5 本時のジグソー活動のようす

<エキスパート活動>

活用した資料は、年齢の近い高校生の作文であったため、生徒も関心を持ち、取り組むようすがうかがえた。資料の前半部分を読んだ後、エキスパート活動では、アルバイト先での失敗が続き、自信を無くしてしまう作者に対して、A「母の立場」、B「仕事先のチーフの立場」、C「客の立場」の作者をとりまく3つの立場の人の気持ちをそれぞれ考えさせた。5分ぐらいの活動であったが、さまざまな立場の人が仕事をする上

<個人で考える>

授業の終末に、「今日の授業をふまえてあなたは職場体験先で、どのように働きたいか」と問いかけ、一人ひとりに考えさせた。その中から3名の生徒の記述内容をまとめたのが表1である。生徒のワークシートへの記述からは、仕事がつらくても悩みを分かち合える仲間が大事だという点や、まわりの人への感謝の気持ちを持って職場体験に取り組みたいということを感じている生徒が多く見られた。

表1 「職場体験先でどのように働きたいか」の記述内容

生徒 A	おそれずに働きたいと思いました。多分、職場体験では失敗をするかもしれないけれど、失敗したからって落ち込んだりしていたら、また失敗するかもしれません。なので、落ち込んでも次に生かせるようにしたいと思います。
生徒 B	僕は、今日の授業をふまえて職場体験先では、作者のように自分なりの働く理由を見つけたいです。なぜなら、どんなに自分に向いていないような仕事でも先輩達の経験を聞いて、その仕事で働くことの大切さや楽しさを見つけて、働く理由を見つけたいです。
生徒 C	職場体験先では、小さい頃お世話になった幼稚園に感謝の気持ちを持って働きたいと思いました。お願いされたら笑顔で応える。お願いされなくても自分から活動したいと思いました。

④ 改善ポイント

授業のワークシートに書き込む分量を減らしたため、意見交換はわりとよくできていた。また、エキスパート活動でそれぞれの立場の気持ちを考えさせることで、さまざまな立場の人が仕事をする上で関わりがあることに目を向けさせることができ、「働くということは、周囲の人々とのコミュニケーションが大切であり、多くの人たちに支えられていることに気づかせる」ことにつながったのではないかと考える。

一方で、エキスパート活動やジグソー活動の話し合いが単調で、意見交換にとどまっていたあまり深まりがなかった。ねらいとする道徳的価値をさらに深化させるための、効果的な問いの設定が求められる。また、授業で考えたことを実践に生かしていく（ここでは、職場体験）ことをさらに意識して、実際の体験はどうだったか、「働くこと」の意義について職場体験後はどう変わったかなど、本時の授業だけでなくその後も見通した授業デザインを構築する必要がある。

授業づくりを学年体制で取り組み、「1つのクラスでの授業をみんなで参観、振り返り、授業計画を修正し、次の実践へ生かす」のサイクルで授業改善を深めていけたのは良かった。その中で、率直に意見交換し合う中みんなが授業づくりを行うことができたことが良かった。

(1) 3学年の取り組み

①実践の主題「自主自律 1- (3)」

自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任を持つ。

②教材づくりの経緯

受験を控えている中学三年生にとって、進路決定は、人生を左右するといっても過言ではないくらい重要である。本校の生徒の実態として、進路先を決定してもその志願理由が曖昧な生徒が多く、自分の意志によって決定している生徒が少ないように感じていた。その例として、進路相談をしても具体的な自分の意思ではなく、保護者のアドバイスや先輩や兄弟から得た曖昧な情報から志願理由を考えていて、自分の主体的な考えではないと感じることや1月末、進路決定をする三者面談の席で親と子どもの意見が食い違って決定しかねることがあった。そこで、これから迎える進路選択や決定を前に、道徳の授業を通して、主体的に自分が進む将来の方向性を周囲の考えや意見を参考にしながら、模索し、決定できることを目的として本主題を設定した。また、本主題を知識構成型ジグソー法による道徳の授業にすることで、7月の漠然とした進路に対する気持ちを生徒同士が互いに対話を通して素直な意見を自由に交流し、自らの考えを引き出し、再構築することができるのではないかと期待して、本実践を行った。

教材づくりは、学年全体で1つの指導案をつくり、その指導案で実践した授業を学年職員で参観し、振り返りを行い、修正をして、もう一度他の学級で実施する方法で授業改善を進めていった。

初回実践した7月は、最初の三者面談前でもあり、自分の進路決定については、明確なイメージは持たず、「なんとなく、親が良い高校だと薦めるから」と他人任せで進学先を決めている生徒が多くいる状態であった。そこで、場面の設定を最後の進路相談後の進路決定前日、主人公「チエ子」が、進路決定について家族と相談したところ、父親と意見が対立し、その場では結論が出なかったという場面にして、進路選択、決定が差し迫っている状況をイメージさせた。そして、「明日は進路決定の日、あなたならチエ子さんにどんなアドバイスをしますか？」という中心発問を設定した。また、エキスパート資料は、チエ子さんの進路決定に対して「チエ子」「父親」「担任教師」3つの立場から

の思いを資料にし、ジグソー活動、クロストークをすることで、「自分の進路選択は、多面的に考えた上で、自分で判断し、決定しなければならない」と感じてもらうことをねらいとして、初回は授業づくりをした。更に、自分に置き換えて考え、授業で得た道徳的価値を落とし込むため、半年後、進路選択を迫られている自分自身に手紙を書かせた。

授業後の振りかえりから、その時期、漠然とではあるが、進路について関心を持っていることもあり、「エキスパート活動は、3つのちがう立場の思いに共感し、ジグソー活動で、それぞれの立場から活発に話し合いが行われていた」「授業後で行った進路相談の中で、自分の考えと親の考えとの葛藤を話してくれる生徒が増えた」という成果があげられた。しかし、授業の終末に手紙を書かせる時間をとったことで、「クロストークの時間を十分にとることができなかった」。また、ワークシートが授業前後で考えの変容がみとれるものになっていなかったため、「生徒のねらいとする道徳的価値が深まったのか、みとることが難しい」などの課題が上げられた。

2 回目の授業実践は、なかなか時間をとることができず、進路決定後の2月に実施することになってしまった。まず、現在の自主自律に関する意識をみとるため、進路決定までの経緯、理由、迷ったときの決め手は何だったかななどのアンケートを行った。結果から、自分の将来を見据え、家族と苦悩して自分で判断し、決定した生徒もいれば、成績や倍率、評判できめるなど、主体性を感じない理由で決定した生徒が混在していることがわかった。そこで、中心発問を「今後、後悔しない人生の選択をするために大切なことは何だろう？」と設定し、中学校卒業後の進路選択で生かせるように教材づくりを行った。

初回の授業から、改善した部分は、中心発問を卒業後の進路選択にも生かせること、選択から決定までの過程だけでなく、決定した後、責任を持って誠実にやり通すことに視点を持って欲しいというねらいで改善した。また、ワークシートは、授業前後で同じ中心発問に答えるものとし、前後で考えの変容がみとれるようにした。そして、ジグソー活動、クロストークに時間を多く配分し、生徒同士が十分に対話できるように展開を工夫し、教師は極力話さず、生徒同士の対話で授業を進めていくことを意識した。

期待する解の要素として、「進路決定は、多面的に考え、自分の意思で判断し、決定する。そして、それを誠実に実行することで、責任を持つことの大切さに気づいている」に設定した。その期待する解の生徒想定解として、「いろんな人のアドバイスをもらいながら自分で選んでいき、その選択を成功させるために努力する」「自分が決めたことに責任を持って頑張り続ける」「いろんなアドバイスから自分で判断して決める。その後は、何があっても他のせいにはしない」などをあげた。

③授業のようす

導入のはじめに「これから起こりうる人生の大きな選択はどんなときにあるかな？」と発問すると、「就職先」「大学進学」「賃貸アパートに住むか、家を買うか」「結婚相手」などの発言が多く出てきて、本時の題材に関心は高いと感じた。次に「後悔のない選択はあるのかな？」と聞くと、「そんなのないでしょ」「じっくり考えて自分できめればいい」「わからん」などの発言があつて、多様な反応があり、盛り上がった。その後で、中心発問を提示し、個人で自分なりの考えを書いてもらった。すごく真剣に書いているようすが、印象的であった。

場面設定のストーリーを読み、「あなたならチエ子さんにどんなアドバイスをしますか？」と発問すると、最近までの自分の状況を思い出し、自然と近くの生徒同士で話していた。

エキスパート活動は、6分間設け、エキスパートA「チエ子さん」エキスパートB「父親」エキスパートC「担任教師」の各立場からの思いを、班で話し合い、確認してジグソー活動に進めた。エキスパートAは、自分と置き換えて考えやすく、納得しやすそうだった。エキスパートBは、資料に金銭的な面からの理由やチエ子の性格も見据えて考えて意見であることが入っているので、「父親ってそうなんだあ」「お金かあ。家のローンとかきついな。」「チエ子の下に2人兄弟がいるのかあ」などの発言が聞こえ、親の視線をはじめて気づいたようすの生徒が数名いた。エキスパートCの班を授業者がまわると、「先生は大変だね」「先生も似たようなこと言ってた」などの声をかけられ、自分たちの三者面談を思い出しているようすだった。しかし、各資料にメモを記入する欄があり、そこに一生懸命記入することに集中してしまい、対話することがあまりでき

ていない生徒がいたことは改善点だと感じた。

ジグソー活動は、11分間設け、各エキスパート資料の立場からチエ子さんへのアドバイスを考えてもらった。ここでは、エキスパート活動で得たことを班に伝えることから始めるのだが、資料をあまり見ず、自分の言葉で、わかりやすく伝えようとする生徒もいれば、資料の文章をそのまま棒読みして伝えようとする生徒がいた。自分の言葉で説明できることは、自分がその資料の立場としてしっかり考えて話していることなので、資料はあまり見ずに伝えることを意識させるための指示が必要だと感じた。その後、チエ子参へのアドバイスを考える活動は、各班で活発に行われていた。そこで気になったのは、班の中で、影響力のある生徒の意見に流されてしまい、他の意見が尊重されていないような班もあったので、すべての意見を平等に扱って、話し合いを進める雰囲気づくりが不十分だったことを感じた。

クロストークは、20分間設けることができ、すべての班を発表させることを意識して行った。はじめ、5つの班を発表させた。その班は、発表内容に少しずつ違いはあるが、「親や先生のいろんな意見を聞き、最後は自分で決めると良い」という多面的に考え、自分の意思で判断し、決定することの重要性に気づけているものの、結果に責任を持って誠実に実行する重要性には気づいていないようすであった。そこで、「チエ子さんに自分を置き換えてみて、今のアドバイスだけで、気持ち良く決断できるかな?」「大切なのは、選んで、決定する前だけなのかな?」という補助発問を生徒に投げかけてみた。その後、残り7つの班を発表させ、1つの班だけが、期待する解の要素に近い発表を行っていた(図6)。

終末に少し授業者の体験を話し、もう一度中心発問について考えてもらった。クロストークに時間をかけすぎてしまい、5分ほど過ぎてしまった。

授業後のワークシートのみとりから、期待する解の要素を含めた解を書けたのは、38名中10名であった。その中の2名、生徒A、Bの変容を紹介する。

生徒Aは、授業前は一言「しっかりと考える」としか書いていなかったが、進路選択後の自分の頑張りが重要であることに気づいている記述になっている(図7)。また、生徒Bは、授業前から多面的に考えて自分の意思で判断し、決定することが述べられていて、授

業後は、期待する解の要素を十分に含まれた他の生徒に紹介したい記述だった。(図7)。

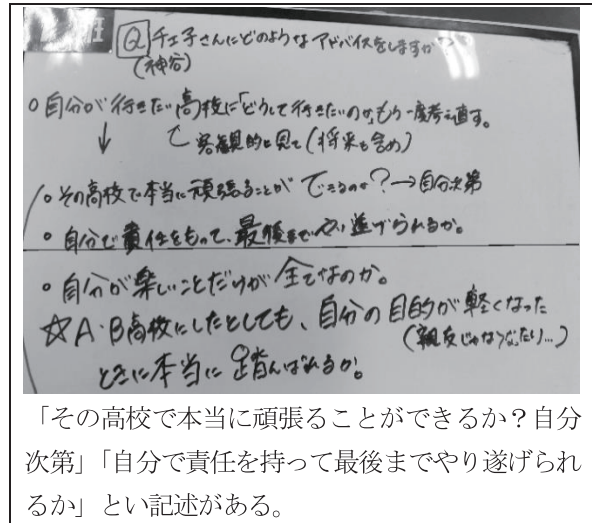


図6 期待する解を発表した班のホワイトボード

残りの28名は、期待する解には達していなかったが、全員、自分の意思で判断し、決定することが大切であることには気づいていた。ワークシートの感想から、本時の授業で、自分の進路決定までの経緯を振りかえり、「今後、どのように自分の意思で判断し決定しているか」という今後の自分の姿を想像してみる良い機会になっていたように感じた。

④改善ポイント

授業後に学年職員と授業検討して出た本時の改善のポイントは、まず、「中心発問の設定については、もっと身近に感じ、イメージしやすい発問にしてはどうか」人生の選択という言葉は中学生には重く感じ、イメージしにくいという意見だった。また、エキスパート資料の文章の量や内容、生徒同士で理解できて、話し合えるように改善する必要があるという意見もあった。一番強く感じた改善点は、クロストークの発表させ方や順序、生徒の意見をつないだり、見えていない部分にさり気なく自然に気づかせるような補助発問などの工夫が必要だということだった。1つの班が期待する解に達していたのにも関わらず、学級全体に広げることができなかったことや、すべての班を発表させたいために、各班発表させて意見を述べるだけで終わってしまい、その発表から深まるような展開にもっていかけてなかった。そのことは、授業者も強く感じており、何回もこのような実践を積み重ねて培っていく部分だと感じた。

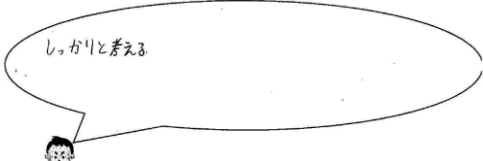
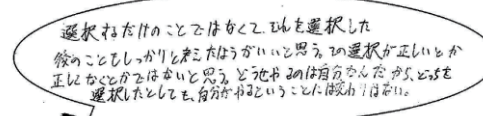
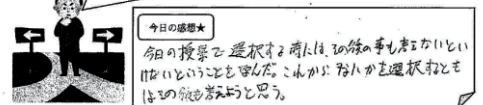
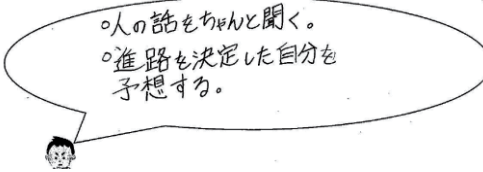
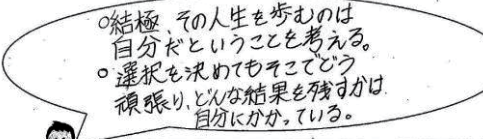
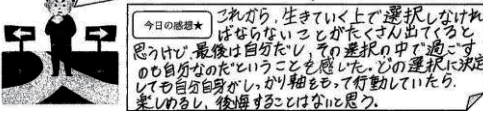
生徒A	授業前	
	授業後と感想	  <p>「どちらを選択しても自分がやるということに変わりはない」</p>
生徒B	授業前	
	授業後と感想	  <p>「選択を決めてもそこでどう頑張る、どんな結果を残すかは自分にかかっている」</p> <p>感想には「どの選択に決定しても自分自身がしっかり軸を持って行動していたら楽しめるし、後悔することはないと思う」と記述されていた。</p>

図7 生徒A、Bのワークシート記述

- 場面設定や読み物資料の選定、問いの設定、エキスパート資料の作成、ワークシートの作成は、「生徒同士が主体的になって話し合い、深めていけるのか」という点を要として「身近で取っ付きやすいものになっているか?」「資料の量は適しているか?」「記述に集中して対話してないのでは?」などを今後、検討する必要がある。
 - 授業実践をした内容と時期は、1 学年が「主として他者とのかかわりに関すること」を中学校入学して2ヶ月後の6月、2 学年が「主として集団や社会とのかかわりに関すること」を職場体験の前に、3 学年が「主として自分自身に関すること」を進路選択前後に実施している。各学年で、その時期や行事前後に必要な道徳的価値は何かを考え、設定することで、生徒が習得した価値をすぐ実践する場があるため、道徳的実践力が身につけやすかったのではないか。
 - 授業づくりを学年体制で取り組み、「1つのクラスでの授業をみんなで参観、振り返り、授業計画を修正し、次の実践へ生かす」のサイクルで授業改善を深めることができた。その中で率直に意見交換し合うことができたのが良かった。
- このことを踏まえ、授業において道徳的に考えを深めさせるために今後、必要だと考えられる2点の課題が明らかになった。
- 「問い」でいかに主体的な意見やジレンマ的な葛藤を生徒一人ひとりの中に生じさせるか。
 - 簡単に解決方法を見いだしたり、主人公の心情が容易に理解できる教材ではなく、異なる視点からの考えを取り入れることができるような教材を用いるか（作成するか）。
- このようにして道徳の授業にも協調的な手法を取り入れて授業を行ったことにより、クロストークにおいて日頃の授業では見えにくい生徒の道徳的な心情を引き出しやすくなったと考える。次年度以降も研究領域に道徳を加え、知識構成型ジグソー法を含め、アクティブ・ラーニング型の手法を取り入れた道徳の授業を全教師で取り組み、実践していきたい。

IV. おわりに

今年度、各学年で1つの授業を何度か実践と振り返りを繰り返し、互いに検討し合いながら、教材づくりや授業実践から見えてきたことを以下に述べる。